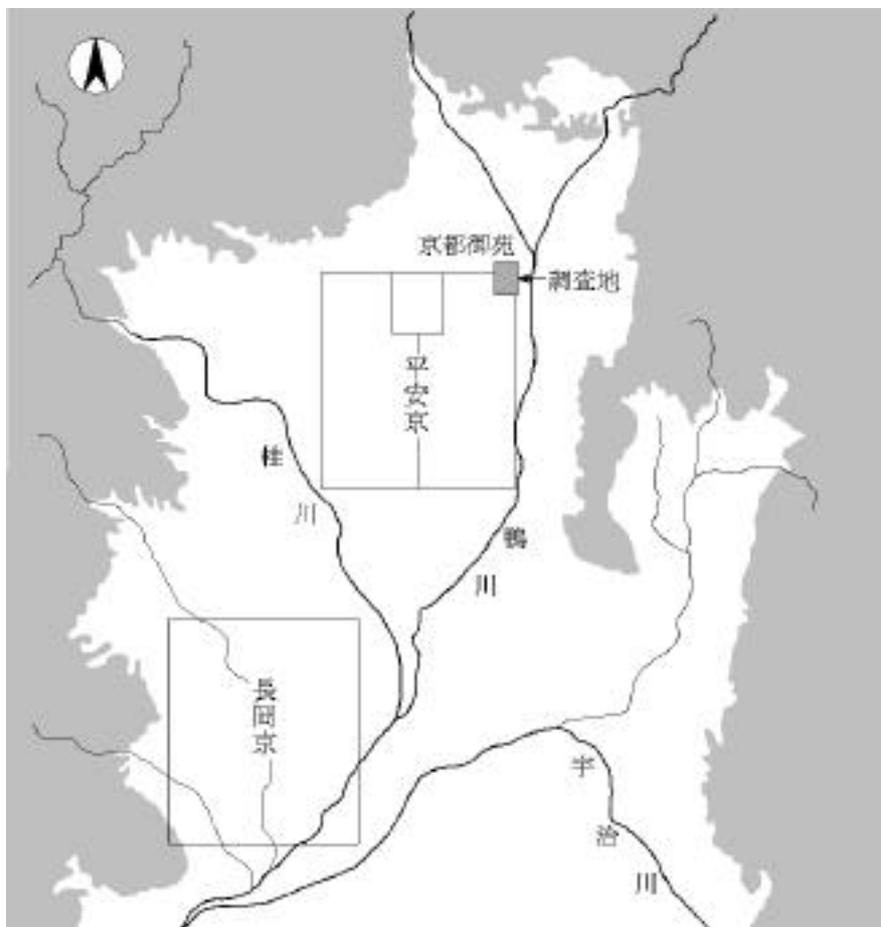


平安京左京北辺四坊

- 京都御所東方公家屋敷群跡 -

発掘調査現地説明会資料5



2000年12月24日

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京北辺四坊 - 京都御所東方公家屋敷群跡 - 発掘調査現地説明会資料 5

場 所	京都市上京区京都御苑 3 (饗宴場跡グラウンド跡地)
期 間	1999年12月 ~ 継続中
調査面積	約4,000m ² (第3調査区)
調査主体	(財)京都市埋蔵文化財研究所

調査の経過

本調査は、京都和風迎賓施設(予定地)工事に伴う発掘調査である。建設予定地内においては1998年に、西北部の緑地帯部分で第1回の発掘調査(GS2)、北東部のゲートボール場跡地で第2回の発掘調査(GS3)、1999年に饗宴場跡グラウンド北西部で第3回の発掘調査(GS4-1)、2000年に饗宴場跡グラウンド南西部で第4回の発掘調査(GS4-2)を実施している。

今回の調査区は、第4回調査地の東隣で饗宴場跡グラウンド東半部にあたる。

現在は平安時代の遺構調査を継続中であり、これまでに江戸時代前期から後期にいたる各時期の公家屋敷と二階丁通、桃山時代から鎌倉時代にいたる遺構などを検出したため経過報告を兼ねて現地説明会を開催することになった。

なお現在までに、下記の現地説明会を行った。

第1回：『平安京左京北辺四坊 - 京都御所東方公家屋敷群跡 - 発掘調査現地説明会資料』

1998年6月13日

第2回：『平安京左京北辺四坊 - 京都御所東方公家屋敷群跡 - 発掘調査現地説明会資料2』

1998年10月24日

第3回：『平安京左京北辺四坊 - 京都御所東方公家屋敷群跡 - 発掘調査現地説明会資料3』

1999年7月10日

第4回：『平安京左京北辺四坊 - 京都御所東方公家屋敷群跡 - 発掘調査現地説明会資料4』

2000年5月27日

調査地の歴史的環境

調査地は、平安京の北東隅、左京北辺四坊の五町・六町・七町・八町に該当する(図1)。七町では、藤原良房の邸宅「染殿」や清和上皇の後院「清和院」が推定されている。本調査区は、七町・八町に位置し、東西方向の正親町小路の推定地にもあたる。

室町時代中期には、「酒屋」などの居住が知られ、町屋化していたとみられる。応仁の乱から室町時代末期にかけて、たびたび朝廷は幕府に命じて禁裏(御所)周辺に濠を掘らせている。

桃山時代以降、御所一帯には公家衆の屋敷街が形成されたが、宝永五年(1708)、天明八年(1788)と嘉永七年(1854)に大火に見まわれ、道路幅や宅地割り、屋敷主の変更を遂げながら幕末まで存続した(図3)。

しかし、明治二年(1869)に天皇が東京へ移ると、御所周辺の施設や公家屋敷は取り壊され荒廃した。そのため、明治十年(1877)頃から数年かけて整備され、現在の公園の姿になった。

「御所周辺の濠」略年表

文明 十四年(1482)	内裏近辺の堀、乱後未だ埋められず。内裏西堀、洪水。
文明 十六年(1484)	洛中に盗賊が横行、朝廷、幕府に命じて内裏東方に溝渠を掘らせる。
明応 四年(1495)	朝廷、幕府に禁門外の池隍を掘らせる。
大永 七年(1527)	盗賊横行により内裏西南の濠を掘らせる。
天文 三年(1534)	朝廷、禁裏六丁町の市民に内裏東南の濠を掘らせる。
天文二十三年(1554)	朝廷、伊勢貞孝、三好長慶、洛中に賦課して内裏東南の堀を浚渫させる。
永禄 四年(1561)	朝廷、禁裏六町衆に東堀を開鑿させる。
永禄 七年(1564)	六町衆に禁裏東堀を掘らせる。

検出した遺構

調査では宝永五年(1708)・天明八年(1788)の大火に伴う焼土層が検出されており、これらの焼土層を指標に時期区分を行い、便宜的に公家屋敷成立から宝永大火までを江戸時代前期、宝永大火後から天明大火までを江戸時代中期、天明大火後から公家屋敷の取り払いまでを江戸時代後期とした。

江戸時代後期の遺構(図2-1)

調査区の中央には、二階丁通が南北に通じ、道路の東西は公家屋敷である(写真1)。

二階丁通 道路幅は15mで、東側約4mの範囲が路面として良好に残存する。路面は数回にわたり小礫を敷き、踏み固められ、道路端には側溝5ならびに51がある(共に幅0.6m、深さ0.4m)(写真2)。

梅園家の遺構 梅園家の敷地は、溝535から集石370までの間と考えている。宅地内では排水口、円形の石組や集石遺構などを検出している。集石遺構は湿気抜きの施設とみられる。梅園家の二階丁通側溝は、石組の遺存状態が良好で、底部も石敷の構造になっている。

聖護院御里坊の遺構 梅園家の南側に位置し、敷地南限を石列485までと考えている。敷地北部では、二階丁通側溝への排水施設である石組溝77とこれに連結する円形石組393、石組井戸392、集石482を検出している。二階丁通側溝の石材は抜き取られてほとんど遺存していない。

今城家の遺構 敷地北半では、瓦組井戸308、側溝へ続く漆喰溝4と円形石組277、集石307がある。その東側には、緩やかな曲線の漆喰塗り池460がある。南半部では石組溝590、石組井戸420がある。さらにその東側には円形石組415がある。南側の甕387は便槽とみら

れる。また、土壙537・636・637には胞衣壺が埋納されていた。二階丁通側溝の石材は、抜き取り箇所が見られるものの良好に遺存する。

柳原家の遺構 柳原家は二階丁通の西側に位置する。敷地南限は石列650までである。敷地東側で漆喰池250・364を検出した。池250は細長い瓢箪状の平面形を呈する。池底の北と南寄りの2箇所に丹波産の甕が埋め込まれている。池364は、漆喰が厚く、底部も深く造っている(写真3)。池が南側に突出する部分には、大小10数個の景石を配している。土壙339には胞衣壺が埋納されていた。この他に土蔵110がある。

櫛笥家の遺構 柳原家の南側に位置し、敷地北東部では建物572、排水口などを検出した。建物の南側には池622や漆喰槽200、円形石組235、瓦敷溝281や円形石組103などがある。甕240は便槽とみられる。土壙182には19世紀半ばの土師器皿を並べた状態で埋納していた。二階丁通西側溝の石組は東側溝に比べ大型の石材で構成し、漆喰の目地を施している。

江戸時代中期の遺構(図2-2)

調査区の中央には、後期と同様に二階丁通が南北に通じ、両側には公家屋敷が配される(写真4)。

二階丁通 西側溝(溝862)は、後期の側溝51の直下で検出した。東側溝(溝1065)は、調査区の北端部において底部付近まで削平された状態で検出した。後期の東側溝より東へ約5mの位置にあり、両側溝間は約10mである。路面は削平されている。道路部の西側部分には、この時期の火災後処理や生活廃材を投棄した土壙245などがある。

梅園家の遺構 溝535Bから柱列Fまでとする。石組井戸、円形石組、石列、石敷き、竈、集石などがある(写真6)。これらの遺構の集中している部分は、台所が想定される。井戸1610の石組は抜き取られており、他所に転用されたとみられる。土壙2249には土師器皿が数枚重ねて埋納されていた。

白川照光院御門跡の遺構 柱列Gまでのやや狭い区画である。敷地西半には、大きめの石を詰めた集石や土壙がある。敷地南半には多量の陶磁器類が投棄された土壙1110がある。土壙1090には胞衣壺(胎児を包んだ膜と胎盤を納めた壺)が埋納されていた。

辻肥後家の遺構 柱列Gを北端とする。敷地北半には井戸や石室、土壙がある。西側には漆喰池、土壙がある。中央部の土壙660・1221・1233には、胞衣壺が埋納されていた。敷地南半には円形石組や土壙がある。また、小規模な円形の集石遺構も多くみられる。

柳原家の遺構 敷地南限は柱列Aまでである。二階丁通西側溝に並行して柱列Bがあり、築地跡とみられる。敷地南半には南北棟の土蔵694がある。土蔵の基礎の地業は、礫と粘土を交互に積み重ねて突き固めている(写真5)。粘土敷き1070は浅く窪み、池とみられる。

櫛笥家の遺構 二階丁通西側溝に並行して柱列Cがある。南西部に建物Dがある。規模は不明であるが南の石列Eが雨落ち施設とみられる。石組溝877は側溝への排水溝である。井戸626は底部付近に井戸瓦で組んだ井筒が残存した。井戸内には多量の埴塼が投棄され

ていた。

江戸時代前期の遺構（図2 - 3）

調査区の東端付近には、17世紀後半の旧二階丁通（新期）が南北に通る（写真7）。

旧二階丁通 小礫を敷き固めた路面が南北方向に部分的に残る。西側溝（溝1080）は、調査区の北端部と南端部で検出した。また、17世紀初頭の旧二階丁通（古期）が約3m東側で南北方向に通る。

安禅寺御門跡の遺構 敷地は、溝2316から溝1635までとする。石組井戸、建物がある。西側溝沿いには、池2180がある。この池は、敷地北側で旧二階丁西側溝から宅地内に水を引き入れ、宅地南側で側溝に水を再び返す構造とみられる。池北部には大型の景石が据え付けられる。宅地南端の土壌1257には胞衣壺が埋納されていた。

柳原家の遺構 敷地南限は柱列J・塀1163（写真10）までである。敷地の北東よりに土壌749がある（写真9）。この土壌は、ほとんど焼土で埋められていた。内部からは17世紀後半の遺物が出土している。その西側には南北棟の土蔵1097がある。また、北側の安禅寺御門跡と同様に旧二階丁西側溝沿いに池2385がある。池の北半部は狭く緩やかに蛇行し、南半部では幅が広がり、底も深くなる。中央南寄りには井戸592・2690がある。

宅地の南西隅には3時期にわたる池（1234・1234B・1234C）がある（写真8）。この池は、17世紀の初めに造られ、同後半までの間に2回の造り替えがあり、次第に規模が小さくなる。

この池は、柳原家の敷地を東西に分割するかのようには設けられている。西側の柳原家宅地内の池西岸の北側では半地下式構造の大型井戸があった（写真12）。

御室御所御里坊 柱列Jを北端とする。旧二階丁西側溝沿いには柱列Kがあり、通りに面する塀とみられる。西の柱列Iは、西側の櫛笥家との境の塀である。中央北に井戸2495があるが、井筒の石材は抜き取られている。西端の塀際にある甕1262は便槽として使用されている。

櫛笥家の遺構 敷地東側には拳大の礫を敷き詰めた池1972がある（写真11）。池は浅く緩やかに蛇行している。西側には、大型の土壌があり、17世紀前半から後半の土師器が大量に投棄されていた。北部には平瓦を積み上げた室1366がある。

桃山時代・室町時代の遺構（図2 - 4）

室町時代後期の遺構には大規模な濠や路面・側溝、土壌、多くの柱穴などがある（写真13）。

濠 調査区の西側に南北方向の濠1940がある（写真15）。規模は幅6.9m、深さ2.1mで、約60mにわたって検出した。調査区の東側の南北濠2630は幅3.1m、深さ2.1mである。濠2630は東西溝965の北で途切れる。断面形は逆台形、2630はV字形を呈する。

溝 調査区の東側の南北溝1195Bは、幅1.6m、深さ1.5mで、約90m検出した。東西溝965は、幅1.2m、深さ1.3mある。溝965の西端は濠2630の東で途切れ、東端も溝1195Bとはつながらない。溝の断面形はV字形で、薬研堀と呼ばれる形状である。

路面と北側溝 正親町小路推定位置の北半部では、礫を敷いた面が東西に断続的に分布する。正親町小路を踏襲した路面とみられ、北側溝も推定位置にあたる。

土壌2083 16世紀の土師器が多量に投棄されている。

小鍛冶関連遺構2512 直径3m程の範囲で地面を掘り窪め、白粘土を貼り付ける。銅の未製品や埴埴、多量の炭が出土する。金属製品の生産跡とみられる。

建物地業1937 南北16m、東西6mの範囲に拳大の礫が積み重ねられる。建物の基礎部分とみられる(写真14)。

井戸には各時代のものがある。井戸1146・2555は桃山時代。井戸2462・2684は鎌倉時代末から室町時代。いずれも井筒は川原石を積み上げてつくる。

平安時代の遺構(図2-4、破線で表記)

現在調査中であるが、正親町小路路面・北側溝、井戸、池、流路、土壌などを確認している。

正親町小路路面・北側溝 推定位置の北半部で小礫を敷いた面が東西に断続的に分布する。路面は北側の幅3.8mが遺存する。北側溝は幅0.9m、深さ0.9mの規模である。10世紀初頭に埋没している。

池 小石を敷き詰めた州浜である。さらに東・南へ広がるとみられる。

井戸2657 平面形は方形で、木枠組の井戸である。

出土した遺物

土壌や溝・各種遺構から、江戸時代、桃山時代、室町時代、鎌倉時代、平安時代の多様な遺物が出土している。遺物の大半が江戸時代のもので、出土総量の8割近くを占めると予想される。

江戸時代の遺物 土師器、土師質土器、肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶磁器、丹波陶器、堺・明石系陶器、輸入陶磁器、土製品、瓦類、漆器類、ガラス製品、銭貨、金属製品、石製品などである。

紀年銘入りの遺物には、硯「元禄 年」「寛政十一年」、碗「天保年製」、瓦「元禄十四」などがある。

特に注目される出土遺物には、柳原家の宅地内の土壌749から出土した17世紀後半の遺物がある。土壌からは、整理箱にして約26箱分の国産陶磁器、輸入陶磁器、焼締陶器、土師器、瓦質土器、瓦類、金属製品、石製品などが出土した。大半が陶磁器類で占められており、国産陶磁器、輸入陶磁器、焼締陶器の遺物点数は330点以上になった。

その内容は、国産陶磁器に美濃系、唐津、志野、京焼の茶陶器、肥前系の磁器などがあり、主体をなす肥前磁器には17世紀半ばの染付や白磁、金彩、五彩、祥瑞写しなどがあつた。輸入陶磁器には明末の芙蓉手、呉須赤絵(青・赤・緑色で上絵付けした磁器)、色絵磁器、ベトナム産碗などが含まれており、焼締陶器には備前や丹波、伊賀の他にタイ産の四耳壺などもみられた。

桃山、室町、鎌倉時代の遺物 土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類、石製品などである。

平安時代の遺物 現時点では土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、輸入陶磁器、瓦類、石製品などがある。

まとめ

- 1) 正親町小路推定位置で路面・北側溝を検出した。路面と側溝は、平安時代前期から室町時代後期までを確認した。
- 2) 室町時代後期に掘られた濠1940・2630、溝965・1195Bを埋め戻して公家屋敷を建設した。その際、濠や溝の位置を踏襲した地割りが施行されたと考えられる。
- 3) 宝永大火以前の旧二階丁通には、新・古の二時期があることが判明した。新期の西側溝1080は、西側に約3m移動している。

江戸時代後期には道路幅が15mあるが、東側の約1/3のみが礫を敷いた堅い路面となる。他の範囲には、後期から幕末にかけての火災後処理や生活廃材の廃棄土壌が集中しており、道路面としての状態は見受けられない。

江戸時代後期の石組側溝は、屋敷によって形状の違いが見受けられる。

- 4) 江戸時代後期の屋敷内にみられる円形石組と連結する石組溝などは、道路側溝につながっており、屋敷内からの排水施設とみられる。
- 5) 江戸時代前期の屋敷には、側溝の水を引き込んで利用する形態の池がある。
- 6) 江戸時代前期の柳原家屋敷内の土壌749で出土した陶磁器類を中心とする一括遺物は、公家文化の一端を示す資料である。

以上が今回調査した、江戸時代公家屋敷群跡の調査成果のあらましである。

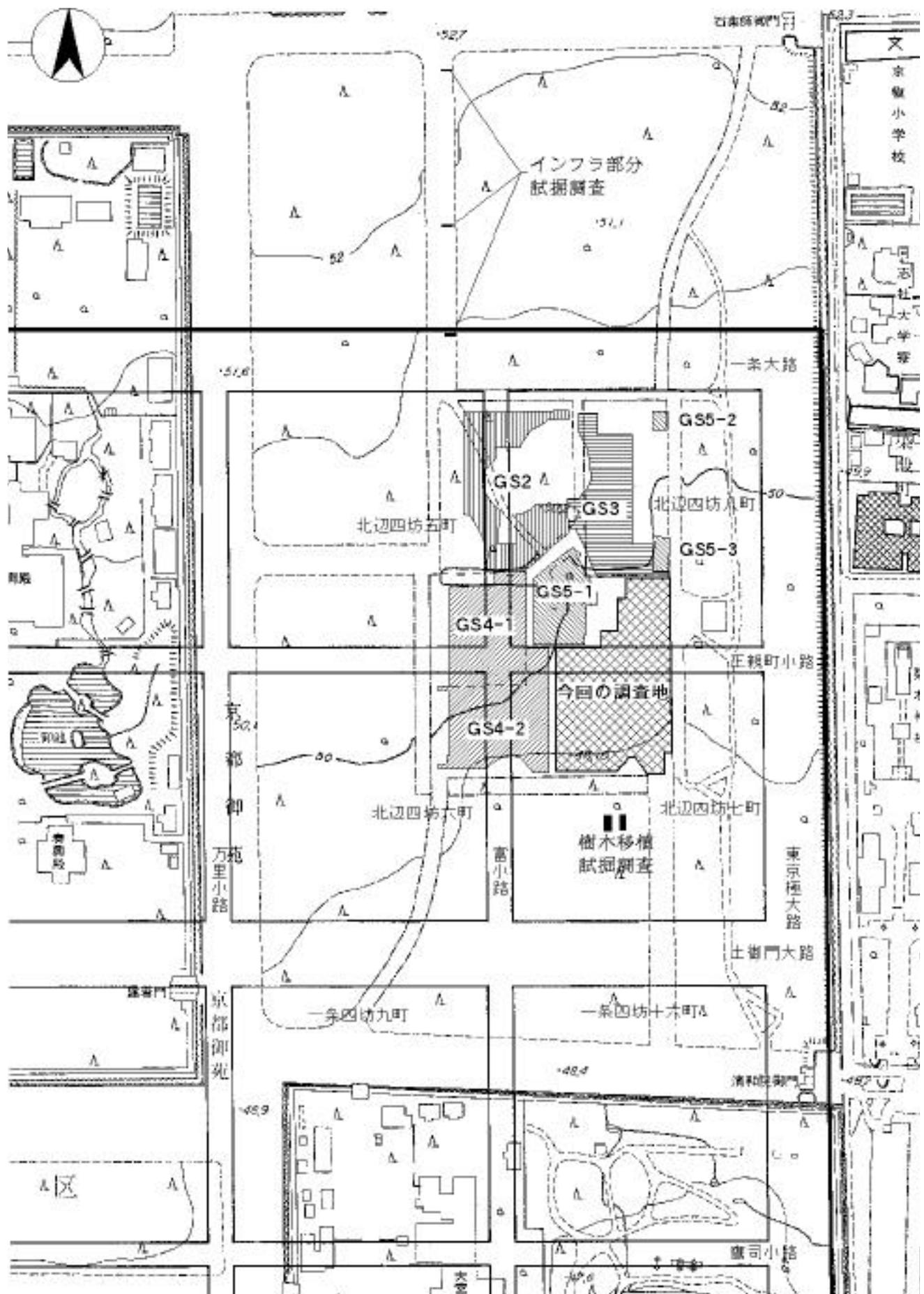
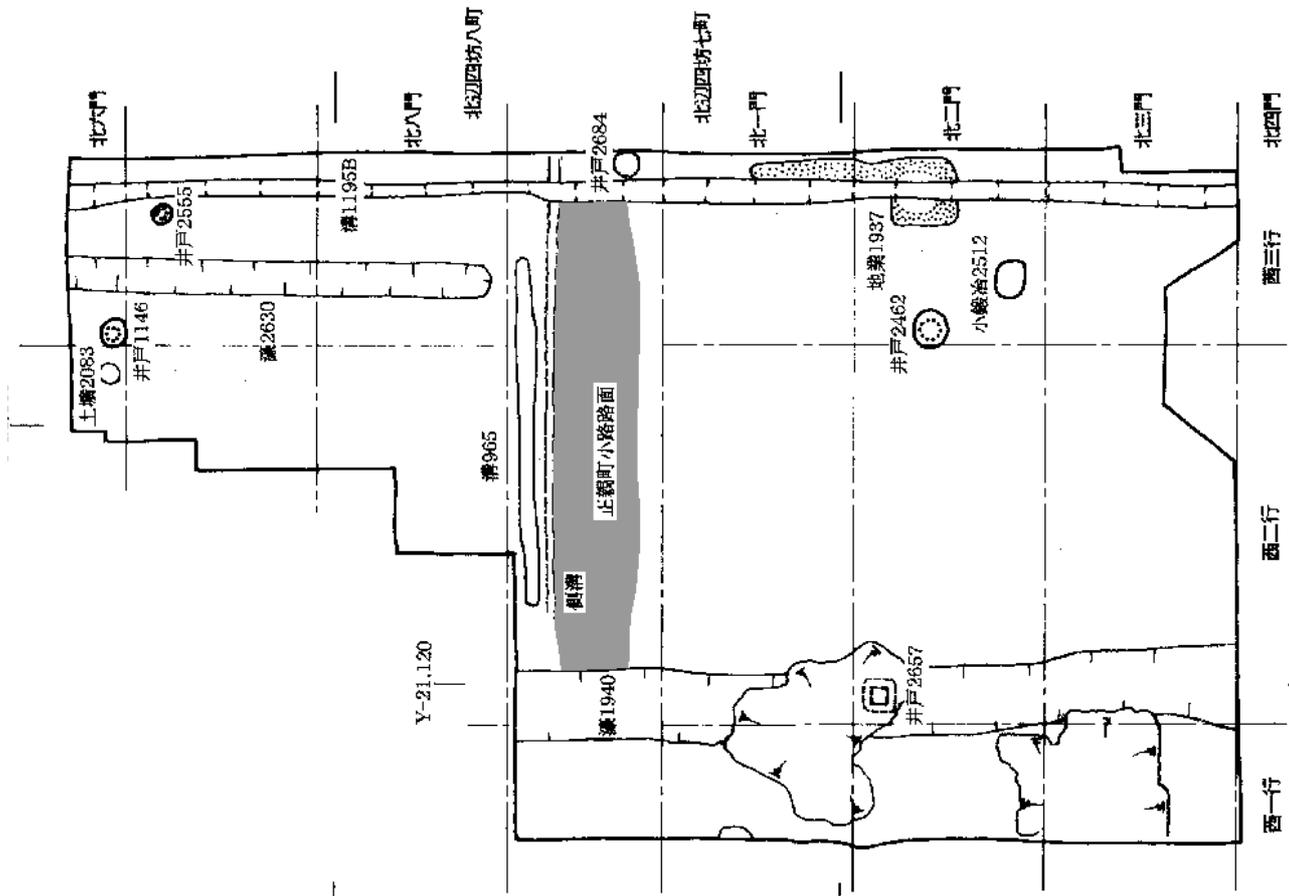
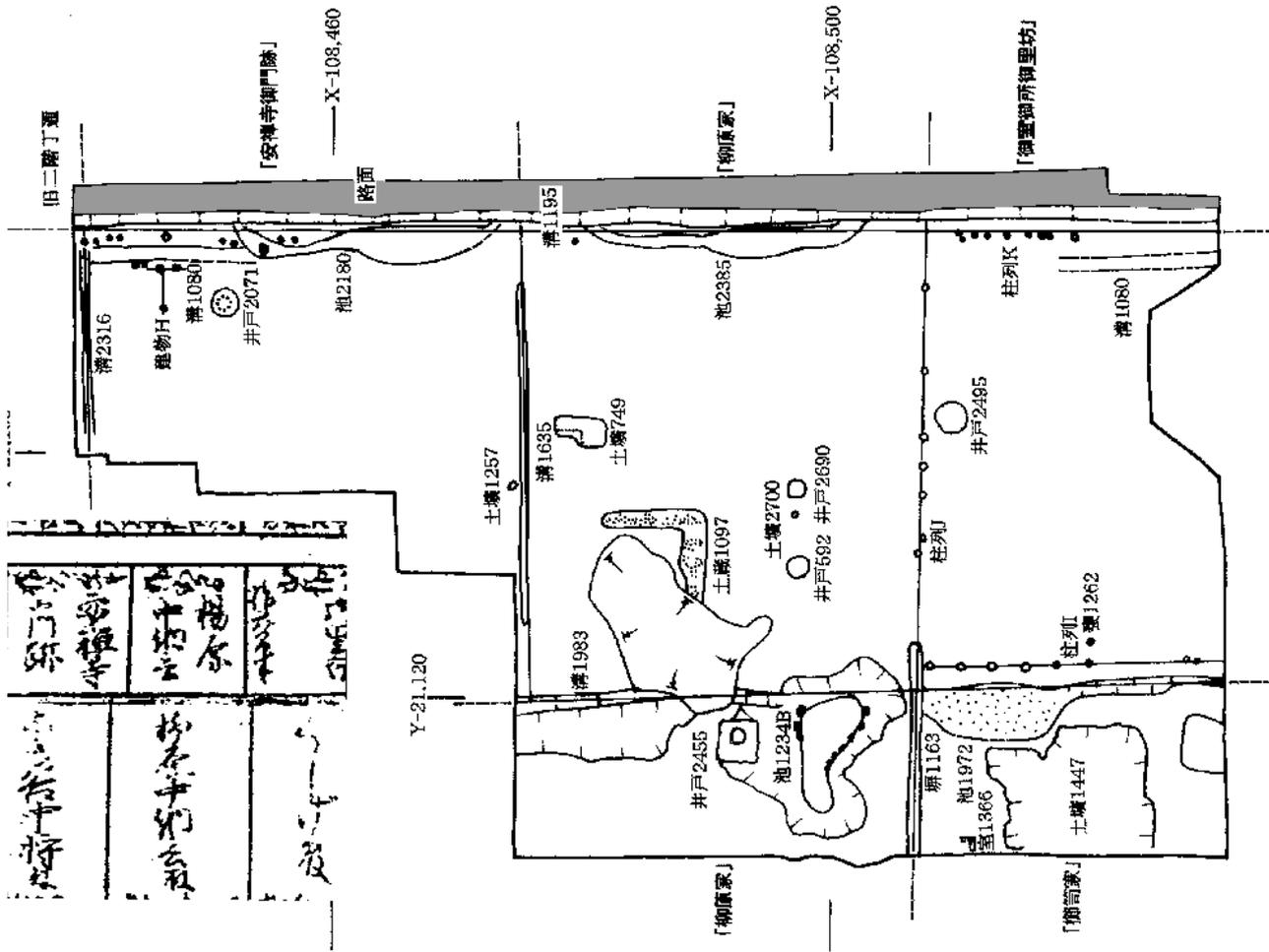


図1 平安京の条坊と調査地 (1:2,500)

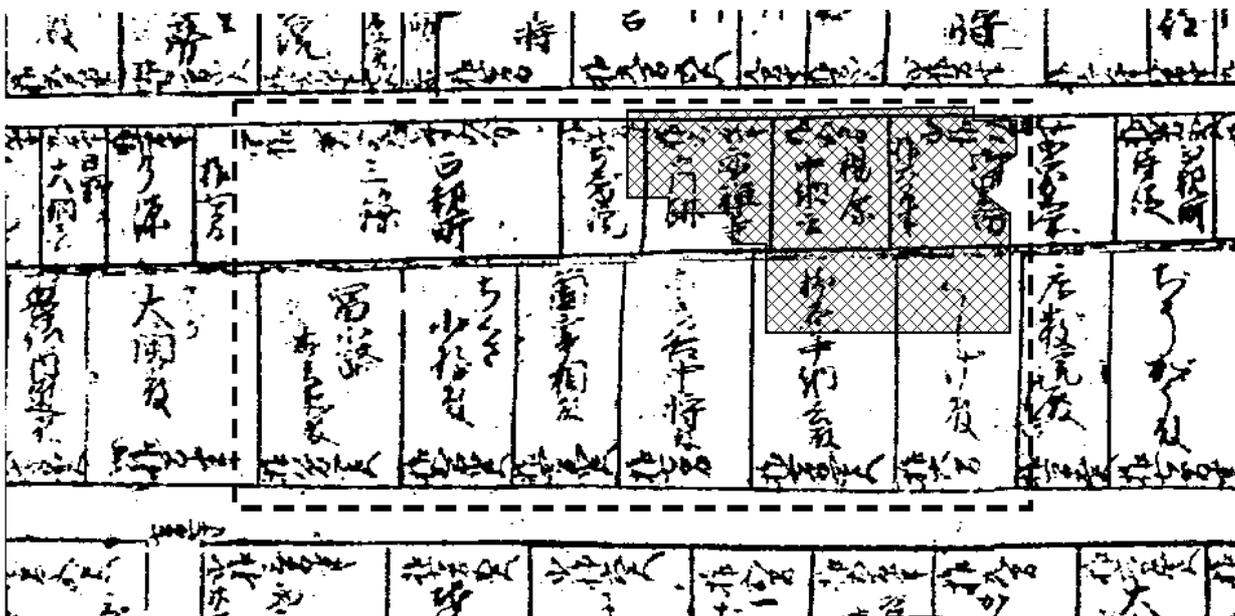


4 平安時代～桃山時代



3 江戸時代前期

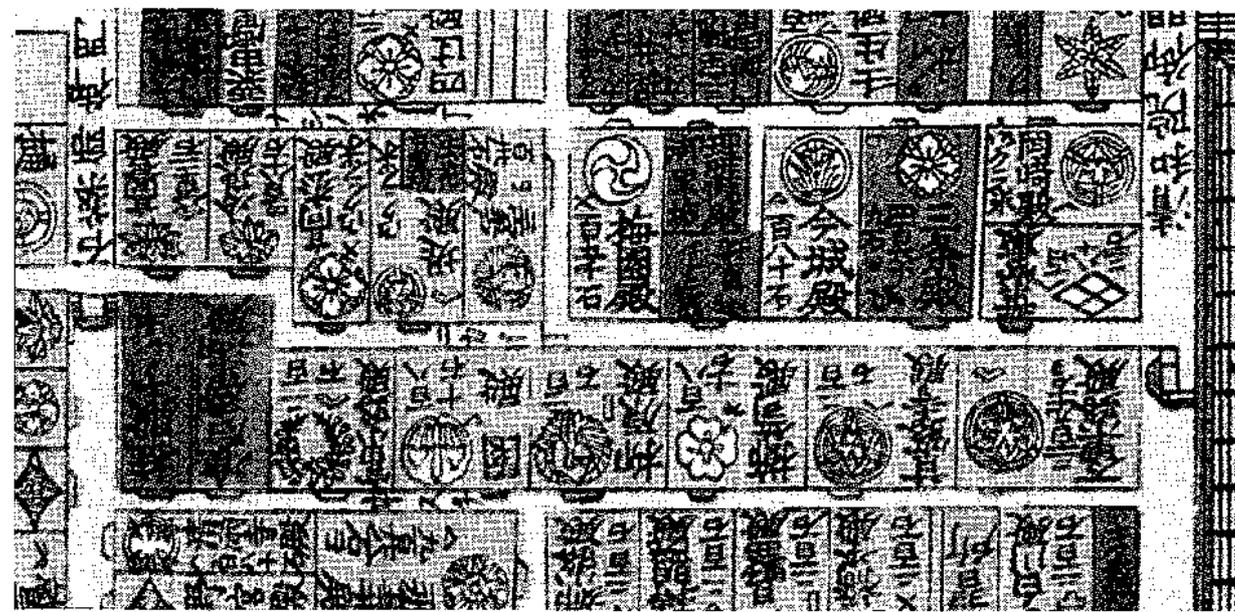
図2 遺構の変遷図 (1:600)



1 『寛永十四年洛中絵図』
寛永十四年 (1637)



2 『享保大絵図』
享保年間 (1716~36)



3 『校正再版 内裏細見之図』
慶応二年 (1866)

図3 江戸時代絵図での調査地付近



写真1 調査区全景（江戸時代後期 北から）



写真2 二階丁通（北から）



写真3 池364（東から）



写真4 調査区全景（江戸時代中期 北から）



写真5 土蔵694（北から）



写真6 井戸824・石組1015他（西から）



写真7 調査区全景（江戸時代前期 北から）



写真8 池1234B（北から）



写真9 土壇749 (北東から)



写真10 堀1163 (東から)



写真11 池1972 (北から)



写真12 井戸2455 (西から)



写真13 調査区全景（鎌倉・室町時代 北から）



写真14 建物地業（北から）



写真15 濠1940（北から）